

## 「仏教詩」を創造する雨新者の精神

石村柳三詩集『晩秋雨』に寄せて

石村柳三さんの第一詩集『晩秋雨』八十篇の詩群は、死に至る病を抱えながらも希望を持ち、たえず生まれ変わって暮らそうとする、草のようになやかな生命力を抱える詩的精神に支えられている。その詩的精神の根源には、法華經の仏教精神が息づいている。宮沢賢治は自分の文学を法華經を世に広めるためのものだと考えて、それを菩薩行のように考えて実践した。石村さんも同様に法華經によって自己の宿命を見詰めてきた詩人である。石村さんがなぜこのように法華經を源泉にした詩論と詩作に携わるようになったのかを少し考えてみたい。石村さんは七人兄弟で、男兄弟五人の一番下だったそうだ。両親は石村さんをお坊さんにしたかったという。それは母親が日蓮宗の信者になり、その影響で石村家は浄土宗から宗派を変えたという。石村さんは母親の影響から、法華經には親しみを持ち、日蓮宗総本山の身延山久遠寺があり、近くの身延山高等学校に入学した。賢治が十代の半ば過ぎに法華經に出会ってその後の運命に大きな影響を与えられたように、石村さんも青森県から山梨県の高校に親元を離れて通ったことが決定的なことだったように思われる。第二章に「母」

という詩があるので、引用してみる。

母

わたしの心の心を  
ただ一点に輝きつづけるもの  
それは 母 である  
澄んだ夜空にキラリ輝く  
一つ一つの星が 母 である  
燃えるような太陽は女であっても 母 ではない  
母は やはり  
キラリ 四季の出自の彼方にあつて対峙し  
澄んだ一点の内応の輝きをする一つ一つの星なのだ  
わたしの心の心で消しえぬ棲みかをつくり  
生のエレジーをひく 星  
それが 母 なのだ  
それゆえに  
六根\*の彼方でキラリ輝け  
—— 母 よ 星 ！  
六根の彼方でキラリ語れ  
—— 母 よ 星 ！

(一九七六年八月七日 鎌ヶ谷市中沢にて)

\*六根＝眼・耳・鼻・舌・身・意の思惟器官。

愛と法華經の精神は初めから重なっていたのだろう。

石村柳三さんは二〇〇七年春に詩論集『雨新者の詩想』(コールサク社)を刊行した。その詩論集が発行された直後に石村さんの母は亡くなった。詩論集が出来ることを誰よりも喜んでおられたとのことだ。詩論集には法華經の精神から汲み上げた命を新たにさせる詩論が展開されていた。今回の詩集はその詩論と平行して書き継がれてきた四百篇を超える詩篇の中から八十篇を選んだ初めての詩集である。詩論集を出した後には詩集を出したいという石村さんの希望があり、実現することになった。

石村さんの詩作は、多くの現代の詩人たちの詩とは根本的に発想が異なっている。詩集のタイトルとなった「晩秋雨」がその典型的な例であるので、引用してみる。

晩秋雨

落葉と雨は  
触れてふれられて  
触れられてふれて  
感応のしずけさにしっとり雨の音をけす  
里や山の落葉にふる雨はどこかふとさびしい  
それは雨心の  
ひとに言えぬ秋のさびしさの泪であるためか

この詩「母」は石村さんが三十年前に三十代前半で書いたものだが、一読すると余りにも母を理想化しているくらいがあるように感じたが、何度か再読していると、この母が実は「法華經」の精神を信じ、息子に託した母の熱烈であり慈愛に満ちた宗教心のことを指しているように思えてきた。そして宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』が想起されてきた。その中の「九、ジョバンニの切符」で「ほんたうのさいはひ」とは何かという問いをジョバンニは発する。その時、銀河鉄道の車窓からはブックホールが見えてきて、「あ、あすこ石炭袋だよ。そのらの孔だよ。」とカンパネルラが指さす。ジョバンニは「僕もうあんな大きな暗の中だつてこはくない。きつとみんなのほんたうのさいはひをさがしに行く」という。するとカンパネルラが近くの野原を指さして「あゝきつと行くよ。(略) あつあすこにあるのぼくのお母さんだよ」と告げる。ジョバンニが白くけむる野原を見ている間にカンパネルラは消えてしまうのだ。賢治は「ほんたうのさいはひ」を探す途上で見かけた野原に、親友の母であり「ほんたうの母」をジョバンニに幻視させようとする。賢治にとつては「ほんたうのさいはひ」は「ほんたうの母」を探し求めることでもあったのだろう。石村さんが記した「生のエレジーをひく 星」それが 母 なのだ」という詩行も、賢治の詩的精神との呼応する意味で、理解できるのではないかと思われるのだ。石村さんにとつて母の慈

ふかまった秋の雨の弧心をしつてるためか

深遠のさびしさをしるひとよ

ときには

晩秋の染まった雨の色に

そのさびしさをつつんだ秋の愛の泪をながそう

雨のなかにあるひとときのやすらぎの

雨音のひめるリズムに

無意識のうちにもちつづける涅槃の音を聴こう

熟したみずからの季節の雨を放射し

てんねんの滅する匂いをうむ晩秋雨に

ふかく

しずかに移ろう色をもやし

秋の雨とともに沈黙してゆく山よ里よ

その沈黙の流露のところに

秋の雨はただただ無心に

裸になりたがっている木々を打ち草を打ち

落葉とのちりゆく遊戯の真実のやさしさを放つ

秋雨や落葉を喰わえ土ねはん

石村さんの詩には、雨が降ってくる、雨を邪魔者扱いや

不吉な気持ちを抱いたりといった現代人の俗っぽい通念とは

全く異なる精神がある。「雨のなかにあるひとときのやすらぎ

の／雨音のひめるリズムに／無意識のうちにもちつづける涅槃

の音を聴こう」という詩行こそ、石村さんが汲み上げてく

る民衆の中に潜在してきた宗教心が日常的に息づきリズム化

しているのだ。現代人が忘れ去ってはいるが、無意識に眠っ

ている「ひとときのやすらぎ」のリズムを甦らせるために、

石村さんは詩の実作を続けているのかも知れない。その意味

では石村さんの詩は、古層とか深層から現代人の表層に立ち

現れてくる、根源的なものを志向している詩篇なのだと考え

られる。「その沈黙の流露のところに／秋の雨はただただ無心

に」という詩行の抱える、流れるように無心になっていき、

その思いを純粹に記していくのが、石村さんの詩作の原点な

のだ。法華経から引かれた「雨新者」（新しきものを雨らす）

という言葉座右の言葉としている石村さんは、詩作におい

ても「雨」を自らの存在を新たにすることを位置づけて

いる。その意味で石村さんの詩論と詩作は一致している。私

はこのような詩と詩論が一致し生涯それを反復しようとする

詩的精神こそを高く評価したいと考えてきた。最も淋しい晩

秋の雨の音に耳を澄ます、無心が優れた詩的精神に転化し、「晩

秋雨」という詩篇が誕生したのだ。雨に濡れることの歎びを

このように記すことができるのは、いかに石村さんが存在論

的にものごとを感受し、存在することの驚きを詩作している

ゲーム店の音

中高生の喋る声　OLやサラリーマンの吐息の声

繁華街の雑踏の音　巷の酒場の男女の色香音

さらには風や雨　海や山　林や川の天然の音

出自した原風景の影ひく音　戦争の傷ひく足跡の音

歴史の時間を刻む音

まだまだある――

これら日常の万の音の世界に

人の　人さまさまの心耳の鬚をながれ

人の　人それぞれの物差しで量る

(略)

――オノレを捉え　オノレを問うことを忘れ

――オノレの胸臆の悲しみを忘れ　澄んだ心根を忘れ

――テンネンの美に息づく風光の慈しみを忘れ

これらただよう世の音に

あわれ人心の旅情音を忘れるな！

人はありあまる日常の世の音にあつて

ただむなしく立ちすくむのはよそう

時間とともにあぶくのように消えうせぬ

内在のアンテナを建て

ころろなごむ美しい音を聴こう

人としての年輪の心の音を聴こう

かがわかる。宗教思想が原点にありながらも、石村さんが一宗派を超えていく豊かな精神の在り方を指し示すのは、生きとし生けるものを慈しんで、「真実のやさしさ」の言葉を発しようとしているからなのだ。

第二章「うちわ慕情」は二十三篇から成り立っているが、雨の音に親しむように、日常の生活音を徹底して聞きとつていく詩篇なのだ。私が推測するには、石村さんは法華経の観音思想を詩作において実践しているのだと思われる。詩「日常の音列の中で」の一部を引用してみる。

日常の音列の中で

――妙音観世音　梵音海潮音

『法華経』普門品より――

眼をひらけば

耳をすませば

人の周りはいつも音の交差の栖だ

たとえば身近な

目覚時計　テレビの音　台所の音　子供たちのさけび

親たちの声　階段の音　風呂の音　屁の音

また街では

自動車　電車の音　建築工事の音　パチンコや

この詩は、石村さんがこだわり続ける法華経の観音思想に基づいた詩論でもありうる詩である。その他の詩はより固有の音の響きに分け入っついていき、その音を生み出す存在者たちを慈しみ、存在者の心に感応している。「心耳」という聞き慣れない言葉も音を通して存在の在り方を問うていると理解すればいいのだろう。つまり石村さんにとって「観音」とは、音の心を観ようとすることなのだ。「風光の慈しみ」とか「人心の旅情音」という石村さんしか発することのできない詩句は、この世にあることの不思議さへの感謝から溢れ出てくる言葉なのだと思う。とてもシンプルな問いを発してそれを原点にして言葉を紡いでいることがわかる。私は一読して独特な宗教用語が出てきて難しい印象を持たれるくらいはあるが、内容的には普遍性があり、詩人たちの枠を超えて読まれる可能性を感じる。石村さんは詩人の枠を超えて、日常の隘路に閉じこめられて苦悩する人間たちに読んでもらいたいと願っているのだろうと思われる。

#### 仏陀の声

——不条理ただよう現代にささやかな

平安を願う一仏教徒として——

仏陀はゆつたりとした朝日のなかをあるく

仏陀はゆつたりとした夕日のなかをあるく

あゆみをする反省の思惟にもあるのだ

おお仏陀のあゆみは存在をつつむ寛容の教えにあり

「人よ われら滅びる人よ」

「遙かなるものへの寛容と

つつまれる慈悲をうしなうな

われら人よ」

仏陀は出自のインドを越え アジアを越え

世界を越えて

無辺の原野をあるく みずからを超えた

燈明として

今も これからも 永遠のあゆみを止めずに

私は石村さんの詩を読み続けているうちに、いつしか大らかに朗々と「仏教詩」という新しい領域を石村さんは創造しているのではないかという思いに駆られてきた。キリスト教徒が「福音詩集」をまとめるように、石村さんはブツダを実感するために、想像力を駆使して仏陀の寛容や慈悲の精神性から「仏教詩」を書き続けているのだろう。その意味で賢治が自分の文学を法華経文学として考えていたように、石村さんも法華経の精神を「雨新」として現代に生かした詩と詩論な

ひとり いそがずあせらず  
広大な原野をみずからの足で  
ひとり いそがずあせらず  
犀のごとくに

ただひとり犀のごとくに

ささやかな風のなかに

おだやかな声をはなち

慈しみの声をはなち

生存するモノすべてよ

いのちあるかぎり生存せよ

ちからいっぱい生存せよ

そのなかにも仏陀の厳しさの声があり

ある日仏陀は釈迦族の滅亡する戦をみて

「滅びざるものはほろびよ」

「滅びざるものはほろびよ」と

悲しくゆがんだ顔をむけてさげんだ

かれらは諸行無常の世であることを真実しらずして

だが救いはそのほろびのなかにある

朝日と夕日と闇のけしえぬなかにある

やすらぎはそのなかに咲くのだ

現実を凝視しようとする耳にもあり

のだ。石村さんはこの十年以上もの間、週に三回透析を続けている。その痛みを抱えながらこれだけの詩を書き続けてきた。いや正確に言うなら、詩や詩論を書き続けてきたから、生かされたのだと石村さんは、少し照れながらも淡々ときつと語るだろう。石村さんの「生存するモノすべてよ／いのちあるかぎり生存せよ／ちからいっぱい生存せよ」と人間の命を肯定する詩行は、法華経の精神に呼応し、底知れないエネルギーに満ちている。これほどのヒューマニズムや森羅万象の生命思想を詩に感ずることは滅多にないことだ。素直に石村さんの詩行に耳を傾けることから多くのことが発見できるだろう。

この詩集はきつと詩人の枠を超えて「救いはほろびのなかにある」という真の智恵を求め人びとにゆつくりと読み継がれていくだろう。「晩秋雨」の降り注ぐ音色に聞き入りながら、「雨新者」を目差す人びとの心に静かに沁みていくだろう。